

日本語における発達性読み書き障害について

県立成人病センター心理判定員（言語聴覚士）

鈴木 則夫



高い知能や言語能力がありながら、文字の読み書きだけが苦手な子どもがいます。

欧米語圏では、音韻操作能力（頭の中で言語音を操る力）の軽微な障害を原因として、読み書き、特に読みの能力の発達に遅れをきたすといわれてきました。

日本語においても、発達性読み書き障害は存在しますが、その出現頻度は欧米語圏に比べ少ないようです。

しかし、漢字、ひらがな、カタカナという多様な文字を使う日本語では、数こそ少ないものの、欧米語圏と性質の異なる読み書き障害があるようです。

欧米語と同じように音韻操作能力の障害に起因し、仮名に強い読み書き障害もあるのですが、漢字という視覚的に複雑な文字を併用する日本語では、視覚認知能力の軽微な障害を原因とする、漢字に強い読み書き障害を呈する子どももいます。

発達性読み書き障害の子どもの支援に大切なことは、その子の文字の読みにくさを作っている原因が何であるかを正確に知る事です。

1つ目は、見ている箇所が飛んでしまい、今どこを読んでいるのか分からなくなってしまうケース。2つ目は、目を動かすのではなく頭を動かして読んでいる。また、指先でなぞることによって、読む場所をはっきりさせながら、実は目の動きの苦手さを補おうとしていた、というケースです。

こうした例は、学習障害のお子さんやADHDのお子さんにも少なくないと言われています。

子どもは、「自分が上手に見ることができているのか」ということが、自分自身では分かりません。そのため、意に反して、つらい思いをしながら過ごしていることも多いと言われています。

他にも、

- 教室で、明るい方を見ると他の子どもよりまぶしがる。
- 頭を傾けたり、目を細めたりして人や物を見る。

などなど、本人にも分からず、まして周りの大人も見落としがちな「目」のトラブルはたくさんあります。心配な時はまず、専門のお医者さん等に相談してみましょう。

子どもたちが、より快適に生活し、学習にもしっかり向き合っていけるよう、ご家庭や学校などで、少しでも早く気づいてあげることがとても大切です。



問合せ先 学校支援課 ☎077-528-4643

特別支援教育

見ることで困っているお子さんがいます！

ある中学校で、授業中ノートを取らずにうつ伏せになって過ごしている生徒がいました。本人への聞き取りや、いろいろな検査の結果、この生徒は、目の遠近の焦点合わせがうまくできていないことが分かりました。そこで、親子で遠近の焦点合わせの訓練に取り組みました。



訓練は、イラストのように、ヒモに緑色、黄色、赤色のビーズを3か所通したものを、眉間からピンと伸ばして、親御さんが言われた色に、お子さんが遠くへ近くへと、すばやく焦点を合わせていくというものです。毎日繰り返すことで、少しずつ速く焦点合わせができるようになり、その結果、学習に向かう姿勢もよくなりました。

この中学生のケースは、「うつ伏せ」が発見のきっかけでしたが、次のようなこともまた、発見の糸口となります。

- 本を読んでいる時、その場所を飛ばしたり、見失ったり、同じところを2度読んだりする。
- 本を読んでいる時、頭を動かしながら読んだり、指先を使って行を追おうとしたりする。